

地域医療に関する議論について
(前回会議 (3/28) における主なご意見)

(ア) 両病院 (国循・市民病院) が隣接することによる連携・機能分担

(総論)

- 始まってみないと分からないところもあるが、実際に動き出してその状況がある程度見えてきた段階で、医療計画や地域医療構想に則って、両病院は具体的にどのようにしていけるかという意見等も保健所から出していきたい。
- 両病院の具体的な連携内容の見える化 (行政、医師会、関係機関等に対する周知) が必要。

(地域医療への支援)

- 吹田市民病院が地域医療支援病院の取得を目指すに当たっては、在宅医療が進んでいくことに係る地域の医療機関への支援として、在宅療養後方支援病院の取得を目指すことが望ましい。これが実施できると国循のサポートにもなるのではないか。

(精神科)

- 両病院の連携においては、まだ具体的な内容があまり見えていないが、国循でできないことをどれだけ吹田市民病院が補完できるのかという点が重要。端的に言うと精神科の部分であり、今後どのように連携をしていくのか、医師会や行政にもわかるような形で示していただきたい。

(研修)

- 移転前の現状でも、看護師間の勉強会を実施したり、国循で研修を終えた医師が経験でも詰めていない部分 (例えば、消化器の部分が弱い、乳腺を知らないため手術への参加等の経験を積みたいなど) について吹田市民病院で経験を積んだり、吹田市民病院の研修医が国循の心臓血管内科に勉強にいったりと連携を進めており、今後も継続していきたい。

(救急隊との連携)

- 救急隊との連携に当たっては、両病院の体制の調整も必要。

(イ) 両病院が移転することによる地域の診療所及び薬局との連携・機能分担

(病診の機能分担・連携)

- 両病院が健都に移ったからいつでも診てもらえるという形で市民に周知するのではなく、まずは診療所や外来専門の医療機関を受診した中で判断してもらい、必要があれば両病院を紹介するということを市民に理解してもらうことが重要。
- 周術期も、退院後も、循環器や糖尿病も含めて口腔ケアの重要性がクローズアップされてきているため、そういう点からも病診連携が重要。

- 薬剤師会の会員薬局では特に在宅に関わるようにしている。退院時カンファレンスにもできるだけ関わられるようにしており、ケアマネからの依頼も多くなってきている。

(医療モールとの連携)

- 病院の機能を補完する医療モールという説明がされているが、医療モールに精神科の医師が入るからといって、その部分での吹田市民病院の精神科機能への取組が後退するというのは保健所としては望ましくないと考えている。
- 吹田市民病院において常勤の精神科医を1名確保できたとしても、自院以外の患者までフォローできるキャパにはならない。精神科疾患患者の救急をみることはできるようになるかもしれないが、全てを引き受けることは困難。対応可能であれば医療モールの精神科の診療所に通院していただくということは両立するのではないか。常勤の精神科医の確保に向けた努力は引き続き行っていく。

(関係づくり)

- 顔の見える関係を作ることが重要。例えば、摂津市や摂津市医師会の講演会等に国循の医師などに参加・協力いただいている。実際には病院が開院してみないと分からない部分もあるが、引き続き実施していきたい。
- 国循や吹田市民病院の先生方に御講演に来ていただいて、吹田市、摂津市の三師会のどなたでも参加できるようなものを年に数回でも開催し、交流をして、その後少し茶話会でもできるような場を大小含めて合同開催という形で何度かできないか。

(ウ) 両病院が吹田操車場跡地に移転することによる近隣病院との連携・機能分担

(精神科)

- 精神科については、国循は阪大病院から週に1回の往診、その他必要に応じて来ていただいているのでなんとかなっているが、需要は非常に大きい。移転後も引き続き阪大病院を中心に人的余裕があるところと連携をせざるを得ないと考えている。
- 三島医療圏では、各病院が集まる協議会事業として、大阪医科大学の精神科の先生に定期的に往診に来ていただき、転送が必要な場合には転送先を探してくれるというコンサルタント事業を行ったことがあった。しかし、あまりニーズがなく、救急の状態から改善した後は病院間で滞りなく遅れるようになってきたという結果だった。そのため、はじめは救急病院が引き受けて、その後、精神科がメインになった場合になるべく早く引き受けてもらえるようにする、あるいは必要があれば医療圏の中で調整をするという形になるのではないか。(摂津医師会)
- 豊能医療圏でもそうした取組を行ったが、頓挫している。今後は精神医療懇話会を設置してその中で議論していく予定。

(脳卒中)

- 国循は吹田市で発生している脳卒中の半数程度をみているが、阪大病院としても、そうした吸引力の強い病院が吹田市の南に移り、吹田市の北あるいは豊能医療圏の北の部分の脳卒中の対応が弱くなるため、阪大病院がそれをカバーしないといけないと考えていると聞いている。具体的にどのぐらいの規模になるかというのは、十分にお互いに相談をして、必要であれば阪大病院にもSCU（脳卒中集中治療室）を強化したいという話もあった。
- 移動先の吹田市医療圏の南とそれに隣接する摂津市や茨木市に対する脳卒中のインパクトは相当強いのではないかと考えており、事前に関係者と協議しておかないといけない。

(大動脈解離)

- 大動脈解離については、ほとんどの病院では対応していないため、二次医療圏を飛び越えて広い範囲をカバーしていきたいと考えている。

(その他)

- 両病院が移転することによる現病院周辺への影響についても、移転後の実態も踏まえながら、圏域内での医療機関相互の連携をどうしていくのかということは検討課題である。平成30年度以降の保健医療協議会や医療懇話会でも議題になっていくのではないか。
- 阪大病院も、国循の移転に伴い患者が増加すると考えており、脳卒中センターとハートセンターについては人的支援の補強を考えている。

(カ) 吹田市（豊能医療圏）、摂津市（三島医療圏）の市境という立地

(行政間の連携)

- 異なる医療圏における保健所・市役所の連携が課題。医療計画上は異なる医療圏となってしまうのはやむを得ないが、吹田と茨木保健所、吹田市と摂津市の行政が二次医療圏を越えた形での連携を模索していただきたい。
- 二次医療圏は前提とせざるを得ないが、例えば、特殊な疾患の治療などは二次医療圏を超えて行われるのが実態であり、そうした点は今後実態を踏まえて懇話会・協議会の中で議論を行っていくことになるのではないか。
- この会議でも両医療圏の取組内容に係る意見交換、行政側の情報交換については引き続きやっていきたい。連携が不十分と思われる点については、こういった連携が良いのではないかとという前向きなご意見もいただきつつ、連携を深めていきたい。

(地域連携パス)

- 三島医療圏と豊能医療圏での地域連携パスの統一は難しい。仮に脳卒中・糖尿病・心筋梗塞等の豊能医療圏のパスを摂津市内で使用する場合は、摂津市内医療機関では様々なツールが混在する可能性が高いため、摂津市医師会の意向をよく

確認して進める必要がある。可能であれば、診療情報提供書のみの運営で進めることが望ましい。

- 地域連携パスの統一は難しいと思うが、吹田保健所で管轄している「心筋梗塞連携パス」については、国から心不全も含めた循環器疾患全般を対象とするよう言われており、国循の指導も受けながら内容を検討中。内容面では、心筋梗塞ではなく心不全を中心に置いて検討しているため、これまで以上にかかりつけ医の関与が重要。このため、これまでの複雑で大変な手帳方式を改め、診療情報提供書を核にしつつ、なるべく簡素な形での連携パスにしていく予定。
- 糖尿病や脳卒中についても、今後、循環器疾患のように必要十分な情報提供となる連携パスとなるよう、医療圏に関わらず考えていく必要があると考えている。両病院にもご指導いただきたい。
- 使いやすいパスであれば二次医療圏を超えて使われるようになるのではないか。それを目指して検討をしていくべき。
- 地域連携パスについては、診療所から急性期病院に戻るルートができていないため循環しておらず、また、脳卒中連携のノートを途中で無くしてしまうことも多いため、診療情報提供書や普段からのお互いの書類のやり取りの中で回転させていくことが重要。例えば、山梨県では、各患者のスマホでQRコードを読むと、各医療機関だけではなくて薬局や介護関係も含めた患者の情報がテキストデータで入ってくるというものもある。患者がそれを持っていれば、電子医療福祉連携手帳ができるというもので、今後はそういう方向でしていくのが良いのではないか。

(救急)

- メディカルコントロール（救急隊員が医療行為をする際の指示）は、豊能医療圏では千里救命センターが実施しているが、それ以外の圏域では府立の救命救急センターが行っている。豊能だけ別となっており、両医療圏で異なる点。
- 吹田の救急車は現場に来た際にホットラインで国立循環器病研究センターのSCU、CCUの先生とダイレクトに話しをしている。移転後も運用は変わらないと思うが、摂津市の消防もそのような連携を行っていく必要があるのではないか。
- ホットラインについて、もし国循の対応が難しくなるということがあれば、阪大病院とのホットラインについても協議をしていく必要があるのではないか。
- 医療圏の違いという点では、現場レベルではあまり感じるところはないが、両病院の移転に伴って、救急隊や救急指令、現場対応も含めた更なる連携体制の構築が必要ではないか。